

低学年 児童期の学習

～保護者のみなさまへ～

小学生をおもちの保護者に、「お子さんの勉強はどんなご様子ですか？」と尋ねると、多くのかたが「うちの子はやる気が足りません」といったような不満を口にされます。「うちの子は成績がよくありません」などという返事は稀です。それは当然のことでしょう。「もっとやる気を出せば伸びるはずだ」と期待するのが親心というものだからです。

あ

い

う

実際のところどうなのでしょう。小学校低学年期の学習は、**学びの手段としての書き言葉の習得や、算数の基本的な技能（掛け算九九や筆算の習得など）の獲得が中心**ですから、「できる子、できない子」などのように能力を云々するのは時期尚早です。前向きに取り組めば必ず成果はあがります。だいいち、元からやる気のない子どもなんていません。何らかの要因が作用して、見た目やる気が足りないように見えるだけです。今、お子さんがいかなる状況にあらうともあきらめるには及びません。



では、**子どもの学習意欲を高めるにはどうしたらよい**でしょうか？ おとうさんが「もっとやる気を出しなさい！」とお子さんを叱っておられる（ご本人は励ましているつもりだと思います）のを見たことがありますか、「これで子どもの意欲が高まるなら、とくに子どもは変わっている」とどなたも思われるのではないのでしょうか。**みなさんの子ども時代を振り返って**ください。親に「勉強しなさい！」と言われてやる気になったのでしょうか。おそらくそんな人は一人もいないことでしょう。



では、**子どもはどのようなときにやる気**を高めるのかについて考えてみましょう。子どもたちに尋ねると、「**できなかった問題が解けたとき**」「**テストでよい点を取れたとき**」「**決めたことを、最後までやれたとき**」「**自分のしたことをほめられたとき**」「**家族で楽しい時間を過ごしたとき**」「**手伝いをしておかあさんに感謝されたとき**」などの返事がありました。後半の三つなどは、**直接勉強に関わりがない**ことですが、こういったことが**子どものやる気につながるのが児童期の子ども**の大きな特徴です。**日常生活で保護者が配慮されれば、子どものやる気**を高める効果が引き出せそうですね。



ただし、前半の三つはやる気が行動に結びついてこそ生じるものであり、どうやったらこんな状況が生まれるのかを知りたいかたが少なくないのではないのでしょうか。そこでお伝えしたいのが「習慣づけを通して“意欲”を引き出す」という発想です。ただし、これだけでは内容に具体性を欠き、保護者の方々の参考にはなりませんので、少しばかりいっしょに考えていただこうと思います。



著名な教育社会学者は、「『意欲』というものは個人に内在するものなどではなくて、環境との関わりで生じるものである」とし、**食欲**を例にあげて説明しておられます。

みなさんは、いなごの佃煮は好きですか？ そう問われて、すかさず「好きです！」とお答えになるかたはほとんどおられないでしょう。昆虫のいなごが食べられるということすら知らず、「おいしいですよ」と言われても気味悪く思う人が多いことでしょう（もっとも、近年は昆虫食が注目されているようですが）。しかし、特定の地域ではいなごの佃煮はよく食べられているようで、子どものころから食べる習慣が根づいている人などは、「いなごの佃煮」と聞くだけで食欲が呼び出されると言います。幼いころから食べてきた習慣のなせる業でしょう。**これは「食習慣」が「食欲」を生み出したのですね。**



同じように、**学習意欲も学習の習慣づけを通して育てられるもの**だと前出の学者は述べておられました。これに基づいて考えると、子どもの学習意欲を高めるには、意欲に直接働きかけるのではなく、**学習を習慣づけることでだんだんと意欲が高められていくのだ**ということができるといえるでしょう。少し具体的に言うと、毎日の学習時間を決め、その時間に必ず机に向かって取り組むことを励行するのです。毎日続けていることはしだいに**習慣化**され、やがて**やるのが当たり前**になっていきます。そのうちに勉強の面白味がわかってくるようになります。そして、ついには問題を解決することの気持ちよさや喜びを知り、**決めた勉強を決めた時間にやらないと気が済まない**レベルへと発展していきます。



そこまで到達した子どもは、間違いなく**高いレベルの学習意欲のもち主**になっていることでしょう。

学習の習慣づけ

- ・ 毎日の学習時間を決める
- ・ 学習メニューを決める
- ・ 親と一緒に机に着いたり、声をかけたりする
- ・ やり終わったらほめる



学習意欲向上

- ・ やるのが当たり前になる
- ・ 勉強の面白味がわかってくる
- ・ やらないと気持ちが悪くなる
- ・ 自信がついてくる





家庭学習研究社では、**低学年のうちに学習の習慣化を図ることを**非常に重要なことだと考えています。高学年になると勉強もかなり難しくなってきます。この段階から習慣づけをはかろうとすると、多くの子どもは億劫がります。学習の計画を立てても、予定の時間になかなか体が思うように動いてくれず、ついテレビを見続けたり、遊びを切り上げることができずにぐずぐずしたり。しかし、**低学年のときから学習の習慣づけをしておけば**そんなことになりません。当たり前のように机に着いて勉強を始めるし、勉強から得られる手応えを知っていますから、学習意欲も旺盛です。



学習計画は**シンプルにしたほうが実行に移しやすい**ので、夕食前の30～40分などのように固定しましょう。やるべきメニューもその時間には固定したほうがよいと思います。玉井式の講座には「できたかな?プリント」、ジュニアスクールには「ホームワーク」という家庭学習用の教材がありますが、これらは学習の習慣化を図るうえでよい働きしてくれるでしょう。**特に「ホームワーク」は学習の習慣づけを強く意識して編集されています。**算数と国語のB4版両面刷りのプリントが週5日分用意されており、学力をつけるうえでも学習習慣を定着させるうえでも大いに貢献しています。教室に通えないお子さんに

は、「**ホームワークコース**」を設置しています。基礎学力の定着と学習の習慣づけにお役に立つと思います。

